

4月5日（日）イースター主日礼拝レジュメ

「イエスのことばを思い出した」 ルカの福音書24章1～12節

① ローマ人への手紙6章23節「罪の報酬は死です。」

② ローマ人への手紙5章12節「こういうわけで、ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がったのと同様に」とありますように、死は人の罪によってもらされた。

イエスキリストが十字架の上で私たちの罪の完全な贖いを成し遂げてくださった。しかし、もしイエスキリストが死からよみがえられなかったなら、罪の結果としての死がそのまま残ってしまうこととなり、罪からの救いは不完全なままとなってしまう。しかし、イエスキリストは確かに十字架にかかって私たちの罪のさばきをその身に負い、いのちを捨てられたが、三日目に死からよみがえられ、死に勝利された。そのことにより罪からの完全な救いが成し遂げられたのであり、イエスキリストの死からの復活を通して、死からのよみがえりの希望が与えられた。

23章50節から議員の一人であったヨセフがイエスの遺体の下げ渡しを願い出て、遺体を十字架から降ろし、亜麻布で包み、まだだれも葬られていない岩を彫った墓に納めた。55節で、その墓と納められる様子をイエスとともにガリラヤから来ていた女たちが見届けた。24章1節で、亡くなられたイエスの遺体にせめて香料だけでも塗ろうと思い、墓に行ったなら、そこにイエスのからだは見当たらず、女たちは途方に暮れていると、まばゆいばかりの衣を着た人が二人、近くに来て、恐れる女たちに「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。」とのことばを聞くこととなった。そしてまばゆいばかりの衣を着た二人は、（御使いだと考えられますが）6節「まだガリラヤにおられたころ、主がお話になったことを思い出しなさい。」と言った。主がお話しになったこととは、9章22節、18章33節で、その内容は7節

「人の子(＝イエス)は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしょう。」いうものだった。「思い出す」とは、「思い当たる、ふと気づく、はっと思い出す。」ということ。ある経験や出来事を通して思い出され、「なるほどそうなのか」と納得することと言える。まさに、イエスのからだは墓の中に見当たらないことと、二人の人が言った「ここにはおられません。よみがえられたのです。」と語られる中で、イエスのことばが思い当たった。9節で女たちは、墓から戻って、十一人、これはユダを除く他のイエスの弟子たちですが、10節では「使徒」と言い換えられています、ほかの人たち全員に、これらのことをすべて報告した。しかし11節「この話はたわごとのように思えたので、使徒たちは彼女たちを信じなかった。」とある。「たわごと」と訳された言葉は医学用語で「精神錯乱のうわごと、支離滅裂な話し」という意味。死人の復活は、弟子たちにはそのように受けとめられたので、彼らはイエスの復活を信じようとはしなかった。

もしイエスキリストは十字架で殺されたが、三日目によみがえられましたと言ったなら、私たちの周りの人はどのような反応をするだろうか。本当にこの人はそんなことを信じているのだろうか、宗教の力なのかとか思うのかもしれない。もちろん私たちも復活したイエスを見たわけではない。しかし、私たちも、死が自分を呑み込もうとする絶望的な状況で、死が自分のしてきたすべてのことを、自分の人生そのものを空しくしてしまうように感じる絶望感の中で、愛する者が自分のもとから去って行くその時に、また私たちが愛する者を残して去って行かなければならない時に、私たちはイエスのことばを思い出す。それは、イエスは死からよみがえられ、今も生きておられ、永遠まで生きておられること、そして死に勝利をしたということ。イエスのことばは、死に絶望する者に死の向こうの永遠のいのちの希望を与え、愛する者との再会の希望を私たちのうちに燃やすもの。

ぜひ私たちの罪のさばきをその身に負い、十字架で死なれたが、三日目によみがえられたイエスを救い主として信じ、よみがえられたイエスのことばを信じて、死の向こうに永遠のいのちの希望持つ人になっていただきたい。